NHK未来への遺産取材記 II

刻まれた情念

NHK

NHK未来への遺産取材記II
刻まれた情念

昭和50年3月25日　第1刷発行
昭和50年11月20日　第29刷発行

〈検印廃止〉　著者　NHK取材班

発行者　浅沼　博

150 東京都渋谷区宇田川町41－1

発行所　日本放送出版協会

振替 東京 49701

乱丁・落丁本はお取替します　三秀舎・興陽社・三森製本

NHK未来への証言取材記 II

刻まれた情念

NHK取材班

© 1975 Kenji Aoki

装幀　荒田秀也・名木山碧

写真はＮＨＫ番組「未来への遺産」より，禁無断転載

序

一九七五年三月は日本の空に最初の放送電波がはなたれてからちょうど半世紀、五〇年目にあたります。七四年春より放送をはじめた「未来への遺産」は、この放送開始五〇周年を記念して制作されています。

放送は日々激動する現代と取り組んでおりますが、また時に人類数千年、あるいは数万年の歴史という巨視的な視野から今日をみつめることも未来への展望をひらくために必要でしょう。

こうしたおもいは、ことに文明が大きな曲り角に立っている昨今、世界の放送機関に共通してうかがうことができます。イギリス放送協会制作の「芸術と文明」シリーズ、イタリア放送協会の「レオナルド・ダ・ビンチの生涯」シリーズなどは、NHKでも放送しましたので御記憶の方も多かろうと存じます。「未来への遺産」はこうした試みを、さらに世界史的な視野から追ってみようとするものです。

人類数千年の歴史におこったさまざまな文明の姿を通して、現代文明の位相をも、おのずからあぶり出してみたい——担当者はそのように願っております。

ここにその取材記を出版するにあたり、取材の際大変お世話になった各国関係機関、ユネスコ、委員会を通して御助言をいただいた先生方各位に深く御礼申し上げます。

日本放送協会放送総局長　坂本朝一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

目次

序……3
序章　誰がどんな情念で……9
I章　謎の沈黙……17
1　もう一つのナイル文明　18
幻の黒人王国へ　18
ピラミッドとヒエログリフ　27
砂に埋もれた謎　38
2　沈黙のヒッタイト帝国　54
謎を掘った人びと　54
鉄を手にした民族　63
3　石の家・ジンバウェ　71
伝説の国　71
「アクロポリス」と「神殿」　78
酋長は語った　90

4 アンデスの謎 102
サン・アグスティンの石彫村 102
ナスカの地上絵 118

II章 巨大さへの情熱……131

1 謎の巨石 136
幻想のストーンヘンジ 136
カルナックの祝祭空間 145

2 巨石彫刻 152
オルメカの巨石人頭像 152
イラン高原の浮彫り 165
デカン高原の洞窟寺院 173
世界最大の大仏立像 187
謎の文明・イースター 199

3 巨大建築 212
ピラミッドをさぐる 212
石の魔術師・インカ 224
積み上げられた巨大・円蓋 235

Ⅲ章　空間と密度……247
1　高みへの情念　248
聖地ル・モン・サン・ミシェル　248
イスラムの塔　255
仏教の塔　272
2　豊穣への祈念　283
アラベスクの連続模様　283
ペルシャじゅうたん　292
雨神チャックの笑い・マヤ　304
3　愛と多産と　317
ヒンドゥーの裸女群像　317
アルテミスの女神　327
繁殖のヴィーナス　337
終章　はるかなる情念……347

参考文献
紀行案内
取材地図……巻末

序章　誰がどんな情念で……

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

――いま、目の前に太古の神殿の廃墟がひろがっている。

砂まじりの烈しい風に何千年と吹きさらされてひび割れた無数の巨石が、前のめりになったり横倒しになったりして、あたり一面に乱雑にころがり、じっと静止したまま、ゆっくりと、さらに痛ましい風化への旅をつづける。みんな、石というより乾ききった骨のいろにちかい。

かつて、これらの石は組み合って、途方もなく巨大な、一つの神聖なかたちを築いていたのだ。そのかたちは、いま再現するすべもなく、無に帰してしまった。

むろん、多くの人びとが、さまざまな遺跡のありし日の姿の再現に挑戦した。その成果によって、数多くの遺跡が復元されている。復元されていない廃墟にも、たくさんの想像復元図が描かれる。全くイメージのちがう復元図が何種類も描かれ、互いに自分のが正しいと争っている例も多い。

しかし、「荒城の月」ではないが、復元されていない廃墟には、人を瞑想に誘う独特の雰囲気と、妖しい美がある。死の世界と隣り合っているかのようなその異様な美は、どんな人をも、とりこにする。イギリスの詩人ローズ・マコーレーは、「野蛮人は、廃墟への愛情を、町を破壊して廃墟を生産することによって、倒錯的に表現して来た」とさえ書いた（*Pleasure of Ruins* 1964）。

この説を正しいとするなら、人びとの廃墟美への執念から数多くの戦争がおこったということになり、人類史を書き変えなければならなくなるだろうが、廃墟のもつ独特の美が、太古から人間の心を魅了したであろうことは、容易に想像できる。

――砂漠の地平線に落ちる夕日が、骨のように乾いた石の肌に、紅をさす。

かつて、ここには巨大な「聖なるかたち」があって、その崇高なシルエットが空にそびえていた、ともう一度想像してみる。それは、どんなかたちであったのであろうか。

もののかたちの生誕の過程を想像してみることは、失われた時への旅人にとって、最も興味ぶかいことの一つである。たとえば、ある民族にとって、「聖なるかたち」が生まれ、そしてそれが「伝統」となるためには、どんな経過が必要なものなのだろうか。

歴史は、太古の宗教建築のすべてが、強大な政治権力と、それを支える富によってつくられたと教える。そして、巨大な神殿や祭祀センターをつくらせた権力者の名をさぐり出して記述する。だから、私たちは世界の大多数の太古の神殿の名を、その建設者とされる権力者の名と結びつけて覚えているわけだが、いざ、それらの神殿の遺跡に立ち、累々たる石また石の廃墟を目にしながら往時を想像すると、思いは別の方向に行ってしまうのである。

――強大な権力者がつくったというが、彼自身にその神殿のかたちが思い描けたはずはあるまい。だとすると、設計図を引いたのはどんな人物なのか。権力者は、その人物に「聖なるかたち」の創造を一任したのだろうか。それとも、その聖なるかたちは、彼らの民族または共同体にとって、すでに伝統になっていて、相談したり裁下を仰いだりする必要もなかったのか。では、さかのぼって、伝統となる以前の聖なるかたちの誕生のとき、権力者なるものの個性はどの程度反映したのだろうか。さらに、聖なるかたちが、相談の必要もない伝統となるためには、いったい、何世代ぐらいかかるものであろうか、などと……。

私には、歴史と関連のあるものに対面したとき、いつも頭と心というか、知識と想像がばらばらになるという、やっかいな傾向があるらしい。以前、歴史ドラマを担当していたときにも、その分裂の制御で困った。頭、つまり歴史家が教えるそれぞれの時代の枠とか、それから生まれる時代劇のしき

たりや約束事を無難に信じ、教え込もうとする側の頭は、むかしはいまと全くちがう時代なのだと説得する。ところが、心は、つまり想像は、猛然とそれに反撥するのである。いまだって、むかしだって、人の心がそう変わっているはずはない、だから、いま、ありそうもないことは、むかしだって不自然なはずだ、と考える。

たとえば、いくら江戸時代の将軍が〝偉い〟からといって、いや偉いからこそ、日常の起居動作は時代劇の描くように儀式ばっていたはずはない。周囲に混乱をおこすことをおもんばかってじっと耐える稀有の名君ならいざ知らず、凡君であるほど、次に何をしでかすか判らぬスリルを秘めて、その動作はおよそ形式的なもの、儀式的なものから遠のくはずだ、というふうに考えてしまうのである。本当に将軍職についた人なら、もう偉いのだから、俺は偉いのだぞと絶えず周囲に誇示する必要はない。だから、脇息にもたれて坐わっているにしても、ごく自然に坐わっているだろうし、当時の女たちにしても、四六時中、悲劇的な難民づらをして、つっぱって暮らしていたはずはない。時代劇は、いや歴史書さえも、むかしはいまとちがうのだという固定観念で描きすぎている……。

要するに、私の場合、頭は知識として過去形を教えているのに、心は現在進行形になってしまうのである。

太古の神殿を前にしてもそうだ。いくら歴史書が、無限の富をもつ強大な権力者の像を伝え、その当時の階級制度を教えて、「強大な権力者が酷使する、まるで家畜のような人間の群れがこれらの古代建築をつくった」と記述しても、心のほうは、なぜか別のことを考えてしまう。

むちで打たれながら石を運ぶ奴隷の群れ、朝から晩までどやされながら石のおのやのみをふるって装飾を刻まなければならなかった石工――歴史書の説明通りにそんな悲惨な姿を想像するのだが、の

こされた作品はおよそ悲惨さとほど遠い。仕事を命じた権力者のほうが「もうその辺で打ち切れ」と命令しているのに、その命令を無視して石工たちのほうが完全主義をめざし、存分に全エネルギーを発揮するまでやめなかったとしか思えない、完全な作品。

実際、静まりかえった太古の神殿あとにひとり立って、石に刻まれた文様や装飾をたどっていると、めまいに似た感じが襲って来て、やがて気が遠くなりそうにさえなって来るのだ。

謎めいて錯綜する線のからみ合い、無限に反復する空想的形象のパターン——壁面をびっしり覆ったであろうそんな装飾を追っていると、それらのかたちの生誕までの長い歴史を思い、それらのかたちを生んだ太古の人びとの心情の無気味なまでの底深さ、おどろおどろしさに次第に圧倒されて、息苦しくなって来るのである。

このように錯綜した複雑な文様や、気品ある均整美を生む形象は、いったいどこから生まれて来るのか、とつくづく思う。

おそらく、一般にそれが建設者の名とされている権力者の固有名詞などはほとんど意味がなく、意味があるのは、ひとつの聖なるかたち、崇高なるもののイメージを創造するまでに高まった、ある共同体のエネルギーなのであろう。

話は全くちがうが、わらべうたや民話・伝説のたぐいには、その細部や全体の本来の意味が全くわからなくなって、謎めいたまま今に伝わっているものが多い。たとえば、

ずいずいずっころばし　ごまみそずい
ちゃつぼにおわれて　とっぴんしゃん

にはじまる、あのわらべうたの意味はいったい何だろう。

たわらのねずみが　こめくってちゅう
おっとさんがよんでも
おっかさんがよんでも
いきっこなあし……

単なる語呂合わせではあるまい。何となく無気味な雰囲気さえ漂っていて、何らかの民族的記憶か、もっと想像すれば歴史的事件の記憶が、わらべうたのかたちでのこったのだという気がするのである。

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』に採集されている「ハーメルンの笛吹き男」は、笛を吹き鳴らし、ねずみの大群を川に連れて行って退治した笛吹き男が、市民が約束を破って報酬を払わないので立腹し、仕返しにまたやって来て笛を吹く。今度はねずみのかわりに子供たちがついて行き、男もろとも山のなかへ消えてしまう。行方不明になった子供の数は全部で一三〇人にのぼるという、無気味な伝説である。

この伝説が一二八四年六月二六日に実際におこった歴史的事件にもとづいており、それが次第に変貌して現在の伝説のかたちになったのだという追跡調査は、阿部謹也氏の好著『ハーメルンの笛吹き男―伝説とその世界―』に詳しい。謎めいた、得体の知れぬ伝説やわらべうたの底には、必ず遠いむかしの庶民の心情が根ぶかくひそんで息づいているのである。

太古の文様や建築の謎めいたかたちは、伝説の構造にいちばん似ているのかも知れない。

空想的形象としかみえぬもの、おどろおどろしく際限なくつづく曲線のからみ合い、呪術的なさまざまな像などのどれにも、太古の庶民の胸に長い年月生きつづけたあらゆる哀歓がこめられているのであろう。

あるとき、それは、かたちとなって花開いたのだ。特定の誰かが創作したというようなものでは決してなく、民衆の、情念の結晶としか呼びようのないかたちで、である。

民衆史というものを、文字で書かれた歴史によってたどることはほとんど不可能にちかい。しかし、民衆の胸に息づいた情念は、太古の石にさえ刻まれているのだ。

第一巻『失われた時への旅』につづいて、これからはじまるのは、太古の人びとの情念を求めての旅である。

（吉田直哉）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c